

藤村全集

第三卷

筑摩書房版

新裝版 藤村全集第三卷

昭和四十二年一月十日初版發行
昭和四十八年四月十五日再版發行

著 者 島 崎 藤 村

井 上 達 三

東京都千代田區神田小川町二ノ八
株式會社 筑摩書房
電話 東京四一七六五一(代表)
振替口座 東京四一二三番

第三卷 目次

春……………三

藤村集……………四七

黄昏……………四九

並木……………五三

壁……………五七

收穫……………五九

一夜……………六九

伯爵夫人……………七九

苦しき人々……………八二

旅……………三五

語註	四七五
校異	四七五
解題	四八一
散 步	四八五
芽 生	四九九
河岸の家	五〇五
奉公人	五一一
雜貨店	五二二
土 産	五三五
弟 子	五四五
死	五五九
青 年	五七五
群	五八三

春

『岸本君、七月二十二日に東海道の吉原まで來給へ。其日を期して東西から富士のもとに會することとしよう。君の都合もあらうと思ふから爲替で旅費を送る。』

斯ういふ意味の手紙が東京に居る友達から行つたので、いよ／＼岸本も西の方の旅から歸つて來るといふ報知があつた。東京の友達はそので新橋を發つ。一行三人、青木、市川、菅——岡見兄弟は都合があつて加はらなかつた。連中が東海道を下つた頃は明治二十六年の夏である。大分其日の汽車は込んだ。一行は疲れて吉原の宿に着いた。會合の場所は街道筋によくある普通の旅人宿である。二階建の離座敷があつて富士は好く見えた。三人が占領したのは其二階の一室で、離座敷の方には他に泊客も無い様子。時々顔を出す四十恰好の家婦より外に放肆な雑談を妨げるものが無かつた。結句氣樂な宿である。汚れた疊の上に寢轉び乍ら、三人は岸本の來るのを待つて居た。

『最早見えさうなものだなあ。』

と言つて青木は身を起した。

青木は瘦ぎすな方で、新しい紺飛白の單衣を着て、兵兒帶を無造作に巻付けて居る。寬げた懷からは白い夏シャツがあらはれて居て、その鈕釦の外れたところに、すこし胸の肌が見える。この男の物を視る眼付、迫つた眉、蒼ざめた頬、それから雄々しい傲慢な顔なぞの表情は、傷つけ破らざれば休まずとも言つたやうな、非常に過敏な

神經質を示して居た。懺悔するやうな口元には何となく人の心を牽引けるところが有つた。それを見ると、世の中の惑溺や汚穢を嘗め知つた人の口唇を思ひ出させる。そこから力の籠つた聲が出る。

『岸本君も困るでせうね。』と青木は市川の方を見て、『是から將來奈何する積なんでせう。』

『さあ。』市川も身を起した。

『さう何時迄も岡見君の世話に成つては居られないだらうし。』

『實は僕も其を心配して居るんです。』と言つて市川は青木の顔を眺めた。

市川は高等學校の制服を着けて居る。薄風色の夏の上衣に包まれた優雅な體格、短く黒い髪、蒼白く廣い額、鷹の嘴を見るやうな隆い立派な鼻——すべて彼の風貌に顯れたところは、東京の下町で堅氣な家庭に育つた人であるといふことを思はせる。彼の細い柔順な眼は、大人のやうな思慮を表して居て、若輩ながらに世上の人を睨むと言つたやうな風があつた。三人の中で、斯の男が一番年少である。

青木は粗末な煙草入を取出して、銚豆煙管でスバ／＼やつて、

『しかし面白い變化さねえ、岸本君が家を飛出すなぞは。』斯う言出した。

『どうして彼の男が旅に出る時の勢は凄じいものでしたよ。』と市川は友達が出奔の當時を想ひ浮べるやうな眼付をした。『麵麴は天にあり、てなことを言つて——』

『はゝゝゝ。』

青木は嘲るやうな聲を出して笑つた。

斯ういふ談話の間、菅は横に成つたまゝ身動きもせず居る。

『菅君は可羨しいねえ。』と青木は考へ深い眼付をしながら、『實に菅君は平和だ。』

『先刻から寝つゞけぢやないか。』と市川も笑ふ。

『僕は眠つて居やしないよ。』と菅も笑出した。『斯うして、君等の談話を聞いて居るんサ。』

二

菅は寢返りを打つやうにぐるりと身を返して、聽て俯臥のまゝ、頰杖を突いた。彼は寢乍ら謹聴といふ態度を執つた。心の好いこと無類といふ斯の青年の眼には哲學者のやうな沈靜がある。彼はまた年に似合はず毛深い方で、腮の邊などは奇麗に剃立てゝ居るが、濃く厚い鬚の痕は青々と人の眼についた。連中で彼を好かないものは無い。彼は年寄にも子供にも好かれさうな性質である。

其時、市川は嘆息して、『實は僕も、もうすこしで岸本君の後を追ふところだつたのです。』

『君も左様いふ氣に成つたかねえ。』と青木は同情のある語氣で言つた。

『なにしろ僕のところなどは事情の多い家庭で、姉と養子の折合は好くないし。』と市川は言ひかけて、暫時對手の顔を眺めて、

『姉は又、何事も知らないものですから、一途に僕を頼りにしてるんです。僕が旅にでも出て了はうものなら、後は奈何なるか知れない。今一步——といふところで、僕は考へました。』

『そこで考へるのが至當だね。』

『岸本君の行き方は左様ぢや無い。彼の男が考へる時分には、最早一步踏み出して了つてる。』

『そんなら見給へ。』と青木は力を入れた。『岸本君のやうに破つて出ようとしたところで——畢竟奈何なる。そこが悲しいところさね。束縛といふ執念深い奴は何處迄も人間に隨いて廻るよ。』

市川は胸を突出して、『兎に角、危険い藝を演つたものだ。』

『はゝゝゝ。』と青木は苛刻い聲で笑ひ出した。旅の友達のをに哭く心と、局促とした自分の身を嘲る心と、斯の二つが今彼の胸には一緒に成つて居る。

『流石の岸本君も弱つて来るだらうなあ。』と市川が言つた。『行くところまで行つて見なければ承知しないといふ男だ。』

『彼の男は昔から彼様いふ風でした。』と菅も寝乍ら腮を突出す。

青木は癖のやうに頭を振つて、『僕に言はせると、あまりに先生は熱し過ぎる。熱するのは面白いが、馬車馬ではツマらん。』

『馬車馬！』市川は横手を打つた。

『彼様固くなつて了つても困りものだ。』と青木は笑ひ乍ら、二人の對手の顔を見比べて、『奈何でせう、君、彼様いふ男には少許酒でも飲ませて見たら。はゝゝゝ。』

『酒を飲ませるか——こいつは面白からう。』と菅は笑ひ乍ら身を起す。

『菅君が斯ういふことを言出すからねえ。』と市川も一緒に成つて笑つた。

不圖物の音がした。

市川はそれを聞きつけて、耳を澄して居たが、人が來たのも何でも無いと解つた時は、菅と顔を見合せて笑つた。待つても、待つても、岸本は見えなかつた。

『君、君、』と青木は待ち倦んで、『斯うして居たつても仕様がな。すこし其邊を散歩いて來ようぢやないか。』
躑て三人は連立つて二階の梯子を降りて行つた。

三十分許り經つて、斯の宿へ來て草鞋を脱いだ一人の青年がある。久留米飛白の單衣に角帶を巻付け、夏帽子、

脚絆、尻端折といふ風體で、肩へ掛けるやうにした風呂敷包二つ、他には大和の檜木笠も携へて來た——斯の男が岸本だ。彼は二階へ案内され、そこで脚絆の紐を解いた。さあ、友達は容易に歸つて來ない。青木や市川やそれから菅の置いて行つたもの、洋傘だの、手拭だの、其他手荷物の類が室内に散亂つて居る。急に熱い涙が岸本の頬を傳つて流れて來た。彼は自分の汗臭い風呂敷包に顔を押宛て、激しく泣いた。

三

『彼程苦勞して來乍ら、斯ういふ光澤で居るんだからねえ。』と市川は意味有りげなことを言つて、久しく逢はなかつた岸本の顔を眺めた。散歩に出掛けた三人は宿へ引返して旅の友達を取圍いたのである。

紅く泣腫れた岸本の頬は先づ三人の心を動かした。彼の粗く剛い髪、大きな鼻、體軀の割合に幅の廣い肩などは、寒い山國の生れといふことを示して居る。傲岸であると同時に柔弱な、過激であると同時に臆病な、感じ易いと同時に愚圖々々とした——斯ういふ憐む可き性質は、彼の容貌を沈鬱にして見せる。彼と、菅とは同窓の友であつた。『旅費まで送つて貰つて濟まなかつたね。』と岸本はかしこまつたやうに坐り直した。彼は難有いといふ面持で、可憐しい友達の前に手を突いた。

菅は氣の毒さうに、『あれは青木君から、君の方へ送つたんです。』

『恐しく物堅いねえ。』と青木は笑つた。『まあそんなことは奈何でも可いさ。』

長い旅の話が始まつた。三人の友達は熱心に岸本の顔を熟視つた。家を出、職業を捨て、友達と離れて、半歳の餘も諸國を流浪して來たといふことは、岸本が精神の内部をよく説明して居た。夫ほど彼は動搖して居た。彼が漂

泊したところは東海道から西の方で、熱田から便船で四日市へ渡る、龜山といふところに一晚泊る、それから伊賀近江の國境を歩いたが、其間には種々な寂しい悲しい旅の思を経験した。黒ずんだ琵琶湖の水を眺めた。西京の舊い都も見た。須磨の海岸には暫時逗留して居たこともあつた。彼は又、伊豫行の汽船に乗つた。それは舊友の足立を訪ねる爲であつた。そればかりではない、彼は大和の方へも一月餘の旅をして、吉野の宿で岡見の兄に邂逅つた。琵琶湖に近い茶丈の生活はまだ岸本の眼にあつた。彼が西京から湖水の畔へ引返して、それから斯の吉原へやつて來る迄、二月半ばかりの間は茶丈を一間借りて居た。其頃は自炊だ。終には小爐を煽ぐのも面倒臭くなつて、三度三度煮豆で飯を喰つたこともあつた。亭主といふは大工が本職で、傍寺へ納める花を作つたし、内儀は内職に螢の籠を張る、子息は天津の下駄屋へ奉公して居る、斯様な人達と岸本はしばらく同じ屋根の下に暮した。そのうちに、蛙が鳴出す、螢が飛んで來る、蚊に責められるのが苦いから彼は自分で紙帳を張つて、裾へは古錢を飯粒で貼付けて、遊團扇でバタ／＼風を入れては其内へ入つて寝た。『ソラ、また始まつた。』と家の人達が聞きつけてクスクス笑つたものであつた。内儀はよく時の惣菜などを皿に盛つて持つて來て呉れた。ある晩、亭主が天津の方へ行つた留守に、紙帳の外で『岸本さん、岸本さん、』と呼ぶ聲がする。岸本は黙つて震へて居たが、それから急に可恐しくなつて、丁度友達から爲替が來たのを幸、逃げるやうにして江州の宿を發つた。尤も斯様な事は三人の前では話さなかつた。

『憐む可き巡禮だ。』

と青木は心に繰返して居た。

四

間もなく飲食する物がそこへ持運ばれた。久しぶりの會合といふので、互ひに酒を酌みかはした。楽しい、放肆な、人の心を浮々させるやうな飲料は、結ばれて解けない岸本の胸をも流れたのである。

『菅君はいけないんですか。』と青木は盃を差して、『すこしやり給へな。』

『いえ、駄目です。』と菅は手持無沙汰に見えた。『僕は奈良漬に酔ふ方の口なんですから。』

『全く菅君はやりません。』と岸本は辯護するやうに言つた。『さう／＼、菅君と一緒に高輪の蕎麥屋で飲んだことがあつた。彼の時は君、ホラ、二人で五勺詠へたつね。』

『五勺詠へるやつが有るもんか。』と青木は笑ふ。

岸本は菅と顔を見合せた。菅は笑つて舌を出して見せた。

『市川君はいけさうだ。』と青木は銚子を持添へて勧めて、『まあ、もう少しやり給へ。』

『僕は蒼くなる方です。』と市川は兩手で頬を押へて見る。

『蒼くなるのは強いんださうだ。』と菅が物を頬張り乍ら言つた。

『一體、市川君は何歳でしたツけ。』と青木は何か思出したやうに、『僕は未だ君の年齢をよく知らない。』

『僕ですか。』と市川は笑つて、『僕は二十一でさ——たしか岸本君は明治五年でしたね、僕は六年だ。』

『左様なあ、皆な未だ若いんだなあ。』と言つて、青木は菅の方を見て、『菅君は寧ろ僕の方に近いでせう——どうも其鬚の様子では。』

『えい。』と菅は笑ひ乍ら、青々とした腮おほの邊を撫でた。

其時市川は眼鏡越し岸本の様子を眺めて居たが、妙に意味有りげな微笑はしみえを浮べた。

自分の膳の上にあつた盃をグツと一息に乾して、それを差し乍ら、

『岸本君の爲に西京の健康を祝す。』

と乙おつなことを言ひ出した。急に岸本は紅くなつた。

『西京といふ人の噂がよく出たツけなあ。』と菅も微笑み乍ら。

『是の男もなか／＼罪の深い方さ。』と市川は岸本の方を見て、軽く對手の膝たを敲くやうな手付をした。『君、君、東京の方で心配してる人が有りますよ。』

青木も菅も笑はずには居られなかつたのである。

纏て共同の事業しごとの話が出た。彼等の中には早くから社會ふなに出て働いて居るものも有り、未だ親がゝりで學校へ通つて居るものも有る。境遇は區々である。岡見兄弟の家といふは日本橋大傳馬町の鏝節問屋であつたから、一切の費用そつちは其方で持出して、雑誌を出すことにしたのが其年の正月——丁度、連中の一人の岸本が旅に出たと同じ月であつた。

酔が廻るに随つて餘計に遠慮が無くなつて来る。岸本が旅で書いた稿もの中にある笑ふ可き文句の眞似などが始まる。菅や市川は盛んに其をやり出した。『馬車馬』といふ言葉も幾度か繰返された。眼の兩側へ手を宛行あてかつて、鼻息ばかり荒く驅出して行く獸の光景さまなどを見せつけられるので、岸本はもうシヨゲ返つて了つた。青木は又、聞いて貰ふ積で、自分の書きかけの草稿を風呂敷包の中から取出して讀んだ。

それは元祿の大家が明治の代に復活ふっかつた頃であつた。外國の文學も次第に海を越して入つて來た。

英吉利イギリスの詩歌——殊にシェクスピアの戯曲は青年の間に讀まれた。よく連中の話頭はなにも上る。

其日も、青木は『ハムレット』の悲劇を持出した。彼は横濱で西洋の俳優が演じたのを見たといふ。その舞臺面の話から始めて、ハムレットに扮した男の身振手眞似までやり出した。さあ、他の友達は眼を瞠る。中には口をモガモガさせて物を食ひ乍ら彼の方を觀て居るものもある。力の籠つた青木の聲は彼の名高い獨語を暗誦するに適して居た。彼は西洋人の寢言を借用して、實は自分の胸の底に蟠る言難い思を傳へようとするらしかった。其時、胸を躍らせたは岸本で、青木の言ふことが一々思ひ當る。岸本は斯の友達に導かれて、今迄自分が考へて居たよりは、更に深く狂皇子の悲壯な精神を感得したやうな氣もした。青木に言はせると、ハムレットは最も悲しい夢を見た人間の一人である。斯の最も悲しい夢を見たといふ言葉が、妙に岸本の胸に響いた。青木は科白を遺つて居るのか、自分を白狀して居るのか、解らなかつた。彼の眼——狂熱の光を帶びた彼の眼は燃え輝いた。彼は冷くなつた酒を飲んで、歎歎くやうに笑つた。

菅は足を投出し乍ら見て居る。

五

ハムレットを見せた青木は更にオフエリヤを見せると言出した。彼は酔つて起ち上つた。花束のかはりに白い帕子を振つて、清しい聲で歌ひ出したのは彼の可憐な娘の歌である。

“How should I your true love know
From another one?”

By his cockle hat and staff,
And his sandal shoon.

He is dead and gone, lady,
He is dead and gone ;

At his head a green grass turf,
And his heels a stone.

White his shroud as the mountain snow,
Larded with sweet flowers ;
Which bewept to the grave did go,
With true love showers."

右譯歌

『いづれを君が戀人と
わきて知るべきすべやある。
貝の冠と、つく杖と、
はける靴とぞしるしなる。』